

定時制高校の中途退学者と学校継続者の比較による検討

——進学動機とストレス反応に着目して——

新潟県立教育センター

吉原 寛

YOSHIHARA Hiroshi

【論文抄録】

本研究は、高等学校の中途退学者と学校継続者の入学時の進学動機とストレス反応および入学後の学習成績、欠席日数、中学3年時の欠席日数を比較することで中途退学者を減少させるための知見を得ることを目的とした。単位制による定時制高校138名を対象として調査を実施した。自律的進学動機、ストレス反応、欠席日数、学習成績を従属変数、中途退学の有無と入学年度を独立変数とする2要因分散分析を行った。その結果、自律性の高い進学動機である「統合的・内的調整」において、中途退学群が学校継続群に比べて進学動機が低かった。ストレス反応の「不機嫌・怒り感情」、「身体的反応」、「無気力の認知・思考」において、中途退学群が学校継続群に比べて得点が高かった。「学習成績」においては、中途退学群が学校継続群に比べて成績が低かった。「入学後の欠席日数」においては、中途退学群が学校継続群に比べて欠席日数が多かった。このような特徴に当てはまる生徒には、中途退学につながる可能性が高いとして配慮が必要と考えられた。

I 問題

近年、学校現場では、生徒指導上の問題として、不登校、いじめ、非行などの学校不適応の問題が課題として取り上げられている。高等学校では、学校不適応の一つとして特に中途退学の問題が課題となっている。文部科学省(2014)によれば、2013年度の中途退学者数は全体で59,742人、中途退学率は1.7%であった。特に定時制課程においては、中途退学率は11.5%と全日制課程の1.2%を大きく上回り、大きな問題となっている。また学年別の中途退学率は、高校1年生で1番高く、学年を追うごとにその率は下がっている。その中で、定時制高校の1年生は23.7%と約4人に1人が中途退学している状況で、非常に高い数値となっている。このことから、入学時の早い段階で、中途退学のための対策を講じる必要がある。そのためのスクリーニングを入学当初にすることができれば、早期の対応が可能になると思われる。本研究では定時制高校を対象とし、入学当初の諸事項を取り上げ、中途退学者と学校継続者と比較することで、どのような特徴に留意すればよいかという指標を明らかにすることを目的とする。

次に、中途退学に関する先行研究を概観する。

竹綱ら(2003)は、中途退学群と卒業群を比較し、入学動機尺度において「目的のある入学」の得点が、卒業群より中途退学群の方が有意に低いことを明らかにしている。竹綱ら(2003)より、高校入学時の進学動機は、高校中退に影響を与え

る可能性が示唆される。しかしながら、竹綱ら（1999）で作成された入学動機尺度は、尺度の信頼性、妥当性が十分に吟味されていないという問題が見られる。理論的背景があり信頼性、妥当性のある尺度で再度、検討する必要がある。進学動機の尺度については、永作・新井（2003）は、Ryan&Deci（2000）の自己決定理論の理論的枠組みを援用して自律的高校進学動機尺度を作成している。下位尺度は自己決定性が高い尺度である「統一的・内的調整」、自己決定性の低い尺度である「外的・取り入りの調整」、この2つの下位尺度の中間の自己決定性として位置づけられた「同一化調整」であった。永作・新井（2005）は、この自律的高校進学動機尺度を利用し、高校入学時の進学動機が「統一的・内的調整」の生徒は学校適応感が高く、「外的・取り入りの調整」の生徒は学校不適応感が高いことを指摘している。永作・新井（2005）は、入学時の進学動機と学校適応感との関連を明らかにしており、学校適応感が高い生徒は中途退学しにくいと考えられる。しかし、直接中途退学との関連については検討していない。入学時の進学動機と中途退学との関連を検討することで、入学当初の早期対応が可能になると考えられる。本研究では、入学時の自律的進学動機と中途退学との関連について検討することとする。

文部科学省（2014）は、中途退学の理由として、学校生活・学業不適応など学校不適応をその理由として挙げ、36.4%の生徒が中途退学をしていることを報告している。学校不適応は学校ストレスと関連の深いことが多くの研究で取り上げられている。例えば、嶋田（1998）は、ストレス反応と学校不適応感との関連について、ストレス反応と学校不適応感は密接な関係があることを見だしている。同様に松尾・佐藤（2003）は、ストレス反応と学校が楽しいと感じる学校享受感は負の関連があることを指摘している。また、斉藤（1999）は、ストレス反応の「怒り・不機嫌」と「抑うつ」は学校嫌いに影響を与えることを明らかにしている。これらの先行研究より、ストレス反応は学校

不適応と関連があることが明らかになっている。また、学校不適応は中途退学と関連することから中途退学に影響を与えている可能性が考えられる。入学時に学校に適応できるかどうかは、そのときのストレスに影響を受けることが想定される。本研究では、入学時のストレス反応を中途退学者と学校継続者を比較することで、ストレス反応との関連について検討することとする。

金子（2001）は、定時制高校を対象として中学時の欠席状況をもとに不登校生徒の学校適応感の研究をしており、中学から不登校であった生徒は高校でも不登校になる可能性が高いことを明らかにしている。しかしながら、中学時の欠席状況と中途退学との関連については検討されていない。また、文部科学省（2014）によれば、中学3年時から高校1年時に継続して不登校であった生徒は28.7%であることを報告している。さらに内閣府（2009）の調査によれば、中途退学者のうち、中学時に3分の1以上学校を欠席した生徒は、24.7%に及んでいる。一方で中学時に不登校であった生徒で学校に通っている生徒は39.4%に上っている。これらの結果だけでは、中学時の欠席日数が高校における中途退学に影響を与えるのかどうかは明らかではない。本研究では、中学3年時の欠席日数が、中途退学に影響を与えているのか、中途退学者と学校継続者を比較することで明らかにしたいと考える。

Lever et al.（2004）は、「欠席日数の多さ」を中途退学の指標として挙げている。また、文部科学省（2014）によれば、高等学校における不登校の数は、定時制高校1年生で1,580人、全生徒数に占める割合は13.7%となっている。不登校生徒のうち、全日制、定時制併せて29.6%の生徒が中途退学をしている。これらの結果より欠席日数が多ければ、中途退学にいたる可能性が高いことは明らかである。これらの結果からは、入学当初の欠席日数がどれだけ中途退学に影響を与えているかは明らかになっていない。本研究における視点は、入学当初の欠席日数が中途退学に関係するかである。また、この統計では、定時制高校におけ

る影響は明らかではない。本研究の目的である、入学当初における要因が中途退学に与える影響を検討するには、入学当初の欠席日数との関連を検討する必要がある。

文部科学省（2014）によれば、学業不振・学業不適応で中途退学した生徒は、13.1%にのぼり、学業との関連が指摘されている。高等学校では、学習成績が不振の場合原級留置になる規定があることが一般的である。原級留置になった場合、生徒は一つ下の学年の生徒と一緒に学ばなければならないと多大なストレスを感じる事となるため、中途退学に至る場合も少なくない。高校入学後の最初の学習成績の結果は、高校における学習意欲にも影響を与え、中途退学に影響を与えることが想定される。本研究では、入学当初の学習成績と中途退学の関連についても検討することとする。

以上より、本研究では定時制高校を対象とし、入学当初の自律的進学動機、ストレス反応、欠席日数、学習成績、中学3年時の欠席日数を取り上げ、中途退学者と学校継続者を比較することで、中途退学と関連性の高いものを明らかにすることを目的とする。

II 方法

1. 対象者

調査対象は公立定時制高等学校1年生であった。1学年午前部2クラス規模の単位制による定時制高等学校であり、午後の授業を履修することにより3年で卒業が可能な高等学校である。調査対象者は2008年度入学生68名（男子35名、女子33名）、2009年度入学生70名（男子31名、女子39名）の合計138名（男子66名、女子72名、年齢範囲15～19歳、平均15.21歳、標準偏差0.53歳）であった。対象者の属性については、138名のうち中学からストレートに入学してきた生徒は114名、中学校からの情報により中学校3年間のうち各学年で欠席日数が30日以上欠席したことのある生徒の人数は、138名中57名であった。

2. 調査測度および手続き

(1) 調査測度

進学動機の測定には、永作・新井（2003）が開発した「自律的進学動機尺度（30項目）」を使用した。下位尺度は「学校は楽しいから」「高校というものは楽しそうだから」など、学校生活の楽しさや人間関係における満足度といった内容を進学動機とする自己決定性が高い尺度である「統合的・内的調整」（9項目）、「普通は学校に行くものだから」「高校には行かなければならないものだから」など、学校へ行くことを義務感や他人からの勧めを進学動機とする自己決定性の低い動機である「外的・取り入りの調整」（14項目）、「自分の学力を上げたいから」「進学のための勉強をしたいと思ったから」など、この2つの下位尺度の中間の自己決定性として位置づけられた「同一化調整」（7項目）であった。信頼性、妥当性は確認されている。回答は5件法で評定を求めた。教示文は以下の通りであった。「あなたが高校に進学した理由について、以下の項目を読んで自分の気持ちに最も近いと思われる数字に○をつけてください。あまり考えすぎずに、正直に答えてください。」であった。

ストレス反応の測定は、吉原・藤生（2005）のストレス反応尺度を用いた（各4項目の合計16項目）。下位尺度は「抑うつ・不安感情」「不機嫌・怒り感情」「身体的反応」「無気力的認知・思考」であった。信頼性、妥当性については確認されている。回答は4件法で評定を求めた。教示文は「次の事柄において、自分の気持ちや体の状態について、どのくらい最近の自分にあてはまるかそれぞれ当てはまる数字に○をつけてください。」であった。

中学3年時の欠席日数は、対象者の出身中学から送られてきた資料を使用した。学習成績は、6月の中間考査の成績を用いた。学習成績は対象者が共通に受験した中間考査の国語、数学、英語、現代社会、保健の5教科の平均点を用いた。入学後の欠席日数は、入学から1学期の中間考査まで

の欠席日数を用いた。

中途退学者については、調査対象校の規定により、2年間単位の取得がないと原則として退学するという規定があることから、2010年3月および2011年3月の段階で中途退学した生徒を中途退学者とした。

(2) 手続き

自律的進学動機尺度、ストレス反応尺度は、高校入学前のオリエンテーションにおいて実施された。回答は、対象者のペースで各個人の自由に任せた。回答時間は概ね15分程度であった。中学3年時の欠席日数、学習成績、入学後の欠席日数は、調査対象校の校長の許可、および対象者とその保護者の同意を得た上で、個人情報漏れなくデータは鍵の掛かるところに保管し、一定期間後には廃棄するようにして最善の配慮をすること、個人が不利益を被らないように倫理的な配慮、個人情報についての配慮がなされることを示した上で必要最小限の情報のみを収集した。

Ⅲ 結果

1. 分析手順

永作・新井（2003）が開発した自律的進学動機尺度、吉原・藤生（2005）が開発したストレス反応尺度は、全日制の高校を対象として分析を行っているため、定時制高校を対象とした本研究では因子構造が異なる可能性も考えられる。そのため、再度因子分析を行い因子構造の確認を行った。得点は各項目の得点を下位尺度ごとに合計したものを下位尺度得点とした。また、学習成績は、各教科の生徒の得意・不得意、年度などによる影響を除くため標準化得点を用いた。調査対象者については、対象者の数が少なかったため、2年分を対象とした。入学年度によって生徒の実態が異なる可能性を踏まえ、入学年度の違いによる検定を行うこととした。自律的進学動機、ストレス反応、中学3年時の欠席日数、学習成績、入学後の欠席

日数を従属変数、中途退学の有無（中途退学群と学校継続群）と入学年度（2008年と2009年）を独立変数とした2要因分散分析を行い、中途退学の有無と入学年度と関連性の高いものを検討した。

2. 因子構造

自律的進学動機尺度については、永作・新井（2003）にならい、3因子構造を仮定し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、解釈可能と判断した。因子負荷量.40未満の項目、2つの因子に対する負荷量の差が.10未満の項目を削除して、再度因子分析を行ったところ、最終的に3因子22項目（説明率53.02%）が定時制高校における自律的進学動機尺度として抽

表1 自律的進学動機尺度因子パターン（プロマックス回転後）

尺度項目	因子負荷量		
	I	II	III
I. 外的・取り入れの調整 ($\alpha = .84$)			
21. 普通は学校に行くものだから	.75	.03	.03
31. 高校に行かないと恥ずかしいから	.73	-.04	.06
20. 高校にはいかなければならないものだから	.70	-.01	.07
10. 高校くらい行っておかないといけないから	.67	-.11	-.12
34. 勉強しないと恥ずかしいから	.63	.05	.12
11. 高校に行かないと就職のときに困るから	.61	-.10	-.02
14. 親や保護者がいけというから	.60	.01	-.33
33. 自分が行きたいかどうかではなく自分の学力レベルに合わせて選んだ結果そうなったから	.52	.06	.09
1. みんなが行くから	.42	-.02	.02
16. 先生が行けといったから	.40	.04	-.13
II. 統合的・内的調整 ($\alpha = .86$)			
29. 行事が面白そうだから	-.08	.96	-.19
28. 校風が良いと思ったから	-.08	.81	-.13
26. 自分が気に入ったから	-.06	.69	-.10
5. 学校は楽しいから	.07	.62	.15
25. 説明会や情報誌などで調べて良いと思ったから	-.09	.59	.07
23. 学校が好きだから	.09	.58	.19
7. 高校というものが楽しそうだから	.11	.50	.10
III. 同一化調整 ($\alpha = .84$)			
3. 進学のための勉強をしようと思ったから	-.20	-.13	1.01
4. 大学や専門学校などの上級学校に進学したいから	-.04	-.15	.86
19. 勉強したほうが得だと思ったから	.17	.16	.53
8. 自分の将来の夢をかなえるため	.00	.20	.52
18. 自分の学力を上げたいから	.04	.33	.46
因子間相関			
	I	-	
	II	.49	-
	III	.38	.56
			-

出された。第1因子は、永作・新井（2003）の「外的・取り入りの調整」（10項目）の項目で構成されていた。第2因子は、永作・新井（2003）の「統合的・内的調整」（7項目）の項目で構成されていた。第3因子は永作・新井（2003）の「同一化調整」（5項目）の項目で構成されていた（表1）。尺度の信頼性の指標としてCronbachの α 係数を用い、尺度の内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.84～.86と十分な値であり、各尺度項目は一貫性の高い項目によって構成されていることが示された。

ストレス反応尺度については、吉原・藤生（2005）にならい、4因子構造を仮定し、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、解釈可能と判断した。因子負荷量.40未満の項目、2つの因子に対する負荷量の差が.10未満の2つの項目を削除して、再度因子分析を行ったところ、最終的に4因子14項目（説明率72.05%）が定時制高校におけるストレス反応尺度として抽

出された（表2）。因子は先行研究と同様に、第1因子は「不機嫌・怒り感情」（4項目）、第2因子は「抑うつ・不安感情」（3項目）、第3因子は「身体的反応」（4項目）、第4因子は「無気力の認知・思考」（3項目）であった。尺度の信頼性の指標としてCronbachの α 係数を用い、尺度の内的整合性を検討した。その結果、 α 係数は.75～.88と十分な値であり、各尺度項目は一貫性の高い項目によって構成されていることが示された。

3. 中途退学の有無と入学年度による2要因分散分析の結果

入学年度における主効果はすべての要因で有意でなかった。この結果より、入学年度による影響はないと考えられる。また、交互作用についてもすべての要因で有意でなかった。

中途退学の有無における主効果は、自律的進学動機尺度の「統合的・内的調整」では、主効果が有意であり、中途退学群が学校継続群よりも低かった（ $F(1,133)=17.48, p<.01, \eta^2=.11$ ）。ストレス反応尺度の「不機嫌・怒り感情」「身体的反応」「無気力の認知・思考」では中途退学の有無においてそれぞれ主効果が有意であり、中途退学群が学校継続群よりも高かった（ $F(1,133)=10.50, p<.01, \eta^2=.07$ ； $F(1,133)=4.84, p<.05, \eta^2=.04$ ； $F(1,132)=5.77, p<.05, \eta^2=.04$ ）。学習成績では、中途退学の有無において主効果が有意であり、中途退学群が学校継続群よりも高かった（ $F(1,118)=8.55, p<.01, \eta^2=.07$ ）。入学後の欠席日数では、中途退学の有無において主効果が有意であり、中途退学群が学校継続群よりも高かった（ $F(1,133)=77.48, p<.01, \eta^2=.36$ ）。分散分析結果を表3に示す。

表2 ストレス反応尺度因子パターン（プロマックス回転後）

尺度項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
Ⅰ. 不機嫌・怒り感情(α=.82)				
15.腹立たしい気分だ	.96	.04	.03	-.20
11.誰かに怒りをぶつけたい	.79	-.17	-.23	.33
13.気持ちがむしゃくしゃしている	.46	.04	.18	.20
1.いらいらする	.45	.18	.03	.05
Ⅱ. 抑うつ・不安感情(α=.88)				
3.悲しい	.01	.97	-.02	-.06
8.泣きたい気分だ	-.12	.82	-.02	.15
4.さみしい気持ちだ	.12	.74	-.04	.04
Ⅲ. 身体的反応(α=.81)				
16.頭がくらくらする	.14	-.02	.89	-.17
9.頭痛がする	-.17	-.01	.88	.13
14.頭が重い	.25	.02	.53	.15
6.目が疲れる	-.14	-.06	.45	.22
Ⅳ. 無力的認知・思考(α=.75)				
10.何もやる気がしない	.05	.00	.12	.69
12.身体から力がわいてこない	.16	.05	.14	.55
2.頭の回転が鈍く考えがまとまらない	.02	.15	.02	.44
因子間相関				
	I	-		
	II	.41	-	
	III	.58	.55	-
	IV	.65	.49	.59

IV 考察

1. 因子構造

自己決定理論をもとにした永作・新井（2003）

表3 各尺度の下位尺度得点および各項目の平均と標準偏差および2要因分散分析の結果

尺度および項目	中途退学群(32名)		学校継続群(107名)		中退の有無	F値	
	2008年(16名)	2009年(16名)	2008年(53名)	2009年(54名)		入学年度	交互作用
自律的進学動機							
外的・取り入れの調整	29.75 (8.85)	31.71 (7.54)	30.56 (8.97)	30.94 (7.38)	0.00	0.48	0.21
統合的・内的調整	17.13 (6.91)	17.87 (6.74)	21.48 (6.11)	23.41 (4.78)	17.48 **	1.27	0.25
同一化調整	14.50 (5.57)	15.93 (6.08)	15.48 (5.49)	17.35 (4.22)	1.32	2.51	0.04
ストレス反応							
不機嫌・怒り感情	4.38 (3.50)	3.47 (3.64)	1.92 (1.77)	2.33 (2.90)	10.50 **	0.20	1.42
抑うつ・不安感情	2.13 (2.75)	1.80 (2.57)	1.37 (1.87)	1.44 (2.20)	1.55	0.08	0.20
身体的反応	4.75 (3.71)	4.27 (3.58)	2.73 (2.72)	3.35 (3.51)	4.84 *	0.01	0.69
無気力的認知・思考	3.63 (2.75)	3.64 (2.06)	2.31 (2.14)	2.59 (2.55)	5.77 *	0.09	0.07
中学3年時の欠席日数	28.69 (46.81)	52.63 (57.42)	24.40 (40.51)	24.24 (41.79)	3.41	1.81	1.86
学習成績	-0.24 (1.19)	-0.94 (0.86)	0.04 (0.97)	0.19 (0.92)	8.55 **	1.33	3.21
入学後の欠席日数	18.13 (14.04)	17.47 (13.02)	5.04 (7.72)	1.28 (2.90)	77.48 **	1.77	0.87

1) 上段は平均値, () は標準偏差

2) * $p < .05$, ** $p < .01$

の自律的進学動機尺度は、全日制高校を対象としており、「統合的・内的調整」「同一化調整」「外的・取り入れの調整」の3因子構造であった。本研究では、定時制高校を対象としており、因子構造が異なることも考えられたが、永作・新井(2003)と同様の因子構造となった。自己決定理論では、動機づけの下位概念である調整スタイルは、自己決定の程度により一次元上に連続体として並べることができるとされている。しかしながら、定時制高校を希望する生徒は、中学校時に不適応であった生徒も多く、その影響で進学動機において自己決定の程度を連続的に見ることができず、自律的か非自律的かの二者択一の選択になる可能性も考えられたが、全日制高校と同様に3因子に弁別されることが示された。

ストレス反応尺度については、全日制高校を対象とした吉原・藤生(2005)と同様の因子構造となった。全日制高校と定時制高校では、課程が違っても学校で受け取るストレス反応に違いはないこ

とが明らかとなった。

2. 中途退学者と学校継続者の比較

中途退学群は学校継続群より、自律性の高い進学動機である「統合的・内的調整」の得点が低いことが明らかとなった。永作・新井(2005)は、「統合的・内的調整」における進学動機の低さは、学校不適応を予測する要因であることを明らかにしているが、自律性の高い進学動機の低さは中途退学に対しても、関連性をもつ可能性が示唆された。また、竹綱ら(2003)は、中退群は卒業群に比べて、目的のある入学の得点が低いことを示している。本研究における「統合的・内的調整」の進学動機が低いことは、この結果を支持する結果となっている。進学動機として、学校生活が楽しいという学校に対する好意的な意識や学校生活を充実したものにしようという意欲を持っている内容のため、そのような意識が低い状態で入学して

くる生徒は、中途退学に影響を与える可能性が示唆された。今後、自律的進学動機の低い生徒については、入学当初から注意して、高校生活の意欲が高まる関わりを考えていく必要がある。

中途退学群は学校継続群より、入学前のストレス反応において「不機嫌・怒り感情」、「身体的反応」、「無気力の認知・思考」の得点が高く、これらが中途退学に影響を与える可能性が示唆された。嶋田（1998）は、ストレス反応における「不機嫌・怒り」「抑うつ・不安」「身体的反応」「無気力」が学校不適応感と正の相関があることを示しており、学校不適応感が中途退学につながることを考えると、本研究の結果は、「抑うつ・不安」以外、嶋田（1998）の結果を支持することとなった。また、斉藤（1999）は、ストレス反応の「怒り・不機嫌」は学校嫌いに影響を与えることを明らかにしており、不機嫌・怒り感情を抱えて入学してくる生徒は、学校に対する不満を抱えている可能性が高い。そのような感情を持って入学してくる生徒は学校に適応することが難しく中途退学にいたる可能性が高いのではないかとと思われる。また、入学当初にストレス反応が「身体的反応」として表出する生徒は、体調不良から欠席日数の増加につながり、学校に適応することが難しくなる可能性が高いのではないかと考えられる。「無気力の認知・思考」についても、中途退学に影響を与える可能性が考えられるが、嶋田（1998）が指摘しているように、無気力と学校不適応感は正の相関を示しており、入学時の無気力は、これから入学する学校に対する意欲が低いことから、学校を継続することの困難さが想像される。ストレス反応は、ストレスマネジメントの研究を始め、ストレスの軽減を図る研究が多くなされており、今後研究の知見を活かすことで入学時の早い段階で適切な対応ができる可能性が高い。入学時にストレス反応の高い生徒には、早期の介入を考える必要がある。

入学当初の学習成績について、中途退学群は学校継続群より、成績が低いことが示され、中途退学に影響を与える可能性が示唆された。文部科学

省（2014）によれば、中途退学の要因として学業不振が挙げられているが、特に入学当初の授業内容は比較的簡単な場合が多く、この時点で学業不振が続くと単位の取得が困難となることも多い。単位の取得ができないことは、高校生にとって進級や卒業への先が見えず、中途退学に影響を与える可能性が示唆された。日々の授業における配慮や個別指導などを通して、早い段階で学力保障を行う必要があるだろう。

中学3年時の欠席日数は、中途退学群と学校継続群の間では有意な差は見いだせなかった。中学3年時に不適応であっても、再出発の機会と考えて高等学校に適応する者と、中学3年時の課題を克服できずに、継続的に欠席が続いて中途退学となる者がいる場合が考えられる。本研究では、その違いを欠席日数だけでは弁別できないことが明らかとなった。今後、中学3年時の欠席日数と他の項目との関連を探り、どのような生徒が中途退学せずに学校生活を送ることができるのか明らかにしていきたい。

「入学後の欠席日数」についても、中途退学に影響を与える可能性が示唆された。Lever et al.（2004）は、「欠席日数の多さ」を中途退学の要因として挙げていたが、入学当初の欠席日数においても先行研究を支持する結果となった。本研究では欠席の理由まで調査を行っていないが、高校に入学してから欠席日数が多いことは、竹綱ら（2003）が指摘している「学校への満足感」が不足していることに関連している可能性も考えられる。欠席の理由についても調査を行っていくことは、今後の中途退学を防止する上で重要になってくるとと思われる。

以上をまとめれば、高校入学前に自律性の高い進学動機が低く、ストレスが高い生徒と、また、高校入学後の早い段階で欠席日数が多く、学習成績が芳しくない生徒は、中途退学に至る可能性を視野に入れることが必要であることが示唆された。今後、中途退学のリスクを持つ生徒を入学時の進学動機とストレス反応によってスクリーニングを行い、入学当初の欠席日数や学習成績に注意を払っ

て生徒をサポートしていくことが中途退学の減少につながると思われる。

3. 今後の課題

本研究は、単位制による定時制高校の生徒を対象としたため、得られた結果が一般化出来るのかという課題も残る。今後は、対象者を広範囲に広げ、一般化出来る結果を求めていく必要があると思われる。また、本研究では、中途退学者と学校継続者の比較から、進学動機、ストレス、欠席日数、学習成績に限定して、分散分析を行って検討したが、本研究ではまったく同一という調査対象者を用いてはおらず、厳密な因果関係については明らかとはならない。今後、ロジスティック回帰分析等を用いて予測要因を検討することで、学校現場での介入に役立つ、要因を追求していく必要があると考える。

2009

- ・ Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000) : Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist* No.55 pp.68-78
- ・ 斉藤浩一「大学新入生のストレスが学校嫌いに及ぼす影響」『高知大学学術研究報告』No.48 1999 pp.235-241
- ・ 嶋田洋徳『小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究』風間書房 1998
- ・ 竹網誠一郎・高梨実・鎌原雅彦・小方涼子・高木尋子「高校生の学校適応に関する研究(2)」『学習院大学計算機センター年報』No.20 1999 pp.38-42
- ・ 竹網誠一郎・鎌原雅彦・小方涼子・高木尋子・高梨実「高校中退予測要因の継続的研究」『人文』No.2 2003 pp.103-109
- ・ 吉原寛・藤生英行「友人関係のあり方とストレスサー、ストレス反応の関係」『カウンセリング研究』No.38-2 2005 pp.128-140

<文献>

- ・ 金子恵美子「定時制高校生との学校生活適応感および学校環境認知-不登校に着目した縦断的研究-」『第43回日本教育心理学会総会発表論文集』2001 p.262
- ・ Lever, N., Mark, A., Sander, M. A., Lomberdo, S., Randall, C., Axelrod, J., Rubenstein, M., & Weist, M. D. (2004) : A drop-out prevention program for high-risk inner-city youth. *Behavior Modification* No.28 pp.513-527
- ・ 松尾美耶・佐藤公代「大学生の対人関係認知およびストレス反応と学校享受感の関連」『愛媛大学教育学部紀要 教育科学』No.49-2 2003 pp.49-55
- ・ 文部科学省「平成25年度『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』について」2014
- ・ 永作稔・新井邦二郎「自律的高校進学動機尺度作成の試み」『筑波大学心理学研究』No26 2003 pp.175-182
- ・ 永作稔・新井邦二郎「自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討」『教育心理学研究』No.53 2005 pp.516-526
- ・ 内閣府「高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査の結果から」『平成21年版青少年白書』